

## 1 . はじめに

鋼橋の性能照査型設計に関しては、ここ数年来の研究活動の成果を具体的に活かす手始めとして、平成13年10月には(社)日本鋼構造協会より「土木鋼構造物の性能設計ガイドライン」が出版された。これに引き続き、平成13年12月には、道路橋示方書が従来の仕様規定型から性能規定型に改訂され、平成14年3月に改訂版が発行されるに至っている。また、土木学会でも平成14年秋には、鋼構造委員会・鋼構造物の性能照査型設計法に関する調査特別小委員会の活動報告書が出される予定である。

本部会では、土木鋼構造の分野では比較的早い1998年5月に活動を開始し2000年6月に報告書をまとめるまでの間、鋼橋の設計に性能照査型設計を導入する際に必要になると思われる情報の収集や整理を行うと共に、現行の設計規準を性能照査型設計に移行するとどのような利点が生じるのか等について検討を加えてきた。しかしながら、活動期間が正味1年10ヶ月と短く、収集した資料や情報の分析・検討が不十分な部分があることも否めなかった。幸いなことに、本部会活動の2年間の延長が認められたことから、2000年7月以降は、検討が十分でなかった点等に関して詰め作業を行うこと、それまでに得られていた成果をさらに発展させることに主眼を置いて、第 期活動をスタートさせた。2002年5月までの第 期では、4つのワーキンググループを設け、性能照査型設計のイメージがより具体的に把握できるような成果が得られるようにすることを念頭において活動を進めてきた。本報告書は、その活動成果をまとめたものであり、具体的な内容は次章以降に記載されている。なお、第

期の検討内容の内、性能照査型設計を受け容れる社会体制・制度のありかたについては、技術委員会・阿部英彦前委員長(現顧問)から、より一層の検討を進めるようにとの強い要請がなされたが、本部会で取り扱うにはあまりに荷が重いテーマでもあることから、土木学会鋼構造委員会・鋼構造物の性能照査型設計法に関する調査特別小委員会の活動成果に期待することにした。

第 期の活動報告書にも記した通り、本部会では、活動開始当初から、「報告書を書くための活動になることだけは回避しよう」と努めてきたため、各ワーキンググループの活動目的や方針に関して一貫性に欠ける点があることは否めない。しかしながら、各ワーキンググループの活動成果は、今後、性能照査型設計を勉強していこうとする若手の橋梁技術者や学生諸君に対し極めて有用かつ実用的な情報を提供できるものと部会員一同期待している。と同時に、読者の方々から、「このような点についてもっと検討すべきではないか、この点に関してはこのように解釈するほうが適切ではないか」等の御助言・御指摘がいただければ、今後何らかの形で活かしていきたいと考えている。

最後になりましたが、本部会の活動を御支援下さった方々に深く感謝致します。

2002年6月  
杉山 俊幸